The Japan Society of Educational Sociology

「不妊問題」への社会構築主義的接近—身体経験の“告白”による「主体」形成

諸田　裕子（お茶の水女子大学）

0．はじめに

本研究は、「不妊問題」の社会的構築過程を、マス・メディア空間に流通する言説に焦点づけて分析・考察したものである。不妊、という身体経験について語るためにどのような語彙が社会に流通しているのだろうか。

従来展開されてきた因果論的問題解決型の議論に先立って、まず、対象である「不妊問題」の「問題性」の社会的構築過程を探る。そして、これまで、「女の問題」としてだけ問題化することによって（図らずも）隠蔽されてしまった個別具体的なもっと別の語り—「不妊問題」を構築し、維持し、変容させている諸々の言説—の解明とそれら言説群の関連づけを行い、「身体経験」をめぐって構築・維持される日常的知識（＝「社会規範」》について研究を進めていくための予備的考察として位置付けたい。

1．問題の所在—「問題性」の再生産—

従来展開されてきた議論のなかでも、特に、「女の問題」について常に“告発”を理論的、実践的に行ってきたフェミニズム的視点による議論は、不妊の「負」というラベルの歴史的構築性を明らかにしている。その議論の特徴は、「不妊問題」の“原因”を「家父長制イデオロギー」に回収し、不妊問題の“解決”を価値的な語彙—例えば、「経験をばねにして」、「前向きに生きよう」といった語り—へと帰属させている点にある。しかしながら、不妊が「女の問題」であること、不妊が「問題」であることを所与として議論をすすめるかぎり、議論自体が「問題性」を構築、維持してしまう。また、「不妊問題」の“解決”を価値的な語彙を動員して語ることのできない人々にとっては、悩みから解放してくれるはずの“問題解決の語彙”が、そのように「がんばることのできない私」を作り出す“問題産出の語彙”として機能するという、逆説的な結果を現象させているのである。つまり、フェミニズム的視点による「女の問題」における特権的な議論は、むしろ、社会の人々の「問題性」構築に言語的資源を提供する強力な知的装置として機能するのである。

2．本研究の立場—社会構築主義的視点—

本研究は、「不妊問題」の考察を社会構築主義的視点から展開する。この視点は「言葉が現実を構築する」という前提命題をもつ。先述したように、「不妊問題」は実に多様な視点から問題化されているが、研究者はどの視点に基づけば「正当な判定者」足りうるのか。「問題性」の主張は、対象の「本質」に由来するのではなく、問題化作業を実践している各自の関心に基づいた「不妊問題」の定義にすぎない。一方、「不妊問題」は、次のような特徴をもつ。不妊という身体経験を解釈するときに利用される言語的資源は、それまで不妊について語られてきたことの蓄積—不妊をめぐる意味世界—である。その言語的資源から、人々は、自分の解釈に有効であると考えた言葉と語り方を参照する。そして、この意味世界は「単線的過程ではなく、石を投げ込んだあとの水面に広がる波紋のように、多方面に展開」し、時には「ある局域的な相互作用のなかではそのようにとらえられなかった発言やそぶり、あるいはそういう意味づけをもって言及されなかった文書や本などが、のちになって」（中河，１９９２）事後的に解釈に利用されることの方が多い、そういう意味世界である。

従って、本研究では、語り方と言葉—解釈のための言語的資源—に着目する。

ところで、本研究が範例としたのは、グブリウムら（訳書，１９９７）による「家族」についての研究である。彼らの研究は、「単線的な過程」としては描くことのできない「家族」を研究対象としている点で、本研究は、「一続きの糸」の記述を目的とする従来の構築主義よりも、グブリウムらの研究に親和性をもっている。

3．データの内容と収集方法

さて、「不妊問題」を解釈するための言語的資源はあらゆるアリーナが提供しているわけだが、なかでも強力な社会的装置であるマス・メディア空間に流通する言語的資源—蓄積された定義—を考察の対象とする。データは、１９８８年から１９９５年の雑誌記事で、いわゆる女性誌や一般雑誌などを含む。雑誌件数６０件、記事件数２７９件である。記事見出しに、「不妊」「不妊治療」「産む」「産めない」という語彙を含むものを選択した。

分析は、「不妊問題」の語りのスタイルと語りのモチーフ（＝話題）に焦点化する。記事見出しに着目することによって見出した語りのスタイルの類型化及び時系列的変容について整理したうえで、典型的に見られた語りのスタイルを語りのモチーフとして位置づけ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

た検討を試みる（当日の報告は、具体的な実証データを提示して議論を展開する）。

4．議論―「自己の身体経験の告白」がもたらすもの

「不妊問題」を語る記事の語り口に着目すると、《医療情報の提示》、《不妊症の増加の警告》、《不妊や不妊治療技術の問題点の提起》というように、特定のスタイルが見出される。そして、それらの中でも、《不妊に悩む当事者による体験の告白》という、従来見られなかった語り方が支配的になりつつある点が記事を時系列に整理することによって明らかになった。この《体験の告白》には、例えば、次のような記事がある。

「ほしいものはなんでも手に入れてきた私には初めての大きな壁でした。だからこそ人の痛みがわかるようになりました。少なくともすんなりと子どもができていた私よりは成長したと思います」

（『BALLOON』1995/6：145）

子どもを得ても得なくても、“経験はムダにされない”ことが「不妊問題」の語りの結末に用意される。そして、この「自分の経験をムダにしない」という語彙は極めて常識的な語彙である。決して「不妊問題」にオリジナルな語彙ではない。自分の語りの結末に「経験を生かす」という語彙を配置することで、自分や語りを聞く他者を納得させているのである。語りのモチーフとして動員される「体験の告白」は、確かに、「これまであまり語られることのなかった」とされている当事者の悩みを第三者に可視化させる作用を持つ。しかし、その一方で、価値的な語彙の動員による「体験の告白」は、語彙を動員できる人／できない人、体験を語る人／語れない人という差異を産出する契機をも内包する。

では、こうしたマス・メディア空間に流通する「不妊問題」を語るための言語的資源を動員した解釈の実践は、どのような帰結を用意するだろうか。“自己の不妊経験を語る”という解釈の実践は、人々のあいだに差異―語る人／語れない人―を作り上げる。この解釈の実践は、「不妊問題」についての知識構築過程を通じて人々が構築し、維持している実践である。人々は、あくまで「不妊問題」について語っているのである。しかしながら、“自己の身体経験を語る”という実践にまず目を向けるとき、語られていたはずの「不妊問題」は自分の経験―「私」そのもの―を語るための素材へと転ずる。「不妊問題」が、“自己の身体経験を語る”ための文脈として位置付くとき、「不妊問題」についての知識は「私である」ための知識―「自己実現」のための知識―へと変容するという帰結が見出される。まさに、不妊という「生殖の領域は身体である〈私〉が身体を所有しその中で〈私〉であろうとする正にアリーナである」（田間，1991）といえるだろう。

すなわち、「不妊問題」は単に不妊や不妊治療をめぐる問題状況について考察するための素材としてだけではなく、“自己の身体への過剰なまなざし”や“自己の経験の中心化”という現代社会における基底的、普遍的な現象を考察する場として意味を帯びるのである。この意味で、因果論的な研究枠組によるのではない、「不妊問題」への社会構築主義的接近は、「不妊問題」の解像力を示した作業ともいえる。

〔引用文献〕

□グブリウムとホルスタイン，1990=1997，中河伸俊他訳，『家族とは何か』新曜社．

□中河伸俊，1992，「社会問題ゲームと研究者のゲーム―『社会問題』と『逸脱』へのコンストラクショ　ニスト・アプローチの諸課題―」，『富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）』vol.25(2)，57-81頁．

□田間泰子，1991，「『身体と社会』の社会学は可能か」，『ソシオロジ』第36巻，pp. 52-57.

NII-Electronic Library Service